


令和7年度看護研究交流センター

# 活動報告書

令和8年5月

 公立大学法人新潟県立看護大学  
看護研究交流センター

## 巻頭言

東京・靖国神社の桜が開花し、平年より早い春の訪れとなりました。高田城址公園の桜が咲き誇る日も、今から待ち遠しい限りです。

さて、当交流センターの2025年度の活動を振り返りますと、各部門が多くの活動に取り組むことができました。

まず、「地域社会貢献部門」の“いきいきサロン”は、全6回のうち2回を若年層の集客を期待し、『放っておけない子どもの肥満 一家族で見直す食習慣一』、『乳幼児がおられる家庭における自然災害への備え』をテーマに開催しました。また、今年度は、『福祉・介護・健康フェア 2025 in 上越』にも出展いたしました。「学生ナースと学ぶ健康ひろば」と題し、出張いきいきサロンや健康セミナーを通じて、多くの市民の皆様と直接ふれあう貴重な機会を得ることができました。

次に、「看護職学習支援部門」は、看護研究支援5コースと看護現場に生かす4コースの計9講座を開催しました。看護現場に生かすでは、本学の客員教授であり、フィジカルアセスメントの第一人者である山内豊明先生（放送大学教授）に『ケアの優先度を決める“看護のアセスメント”』をテーマにご講義いただきました。大変好評を博したこの講座を、2026年度も引き続き開催いたします。

「地域課題研究開発部門」は、2025年10月18日に“地域課題研究・上越地域看護研究の合同発表会”を開催し、77名の方にご参加いただきました。

「専門性の高い看護職育成部門」では、『上越圏域看護部長会の活動支援』と『専門看護師のネットワーク支援』に取り組みました。『専門看護師フォローアップ研修』では、「コンサルテーション」をテーマに開催し、講義およびシンポジウムともに好評でした。

2026年度も、各部門の活動が実り多いものとなるよう、鋭意取り組んでまいります。今後とも変わらぬご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

令和8年3月吉日

看護研究交流センター長 岡村典子

# 令和7年度看護研究交流センター活動報告書

## 目次

巻頭言	1
<b>I. 事業実施報告</b>	
事業概要	4
事業費	7
公開講座等実施報告	8
事業広報活動	10
<b>II. 部門報告</b>	
地域社会貢献部門	12
看護職学習支援部門	16
地域課題研究開発部門	21
特別研究部門	25
専門性の高い看護職育成部門	26
<b>III. 事務局報告</b>	
出前講座実施及び結果報告	29
<b>IV. 地域課題研究助成及び研究成果報告</b>	
2024年度地域課題研究助成報告及び研究成果報告	33

# I . 事業実施報告

# 事業概要

新潟県立看護大学では、大学と地域の交流の場として「看護研究交流センター」を平成 14 年 4 月に開設しました。

大学の建学の精神である「ゆうゆう・くらしづくり」に基づき、大学の教育・研究の成果を地域へ提供し、活動を通じて地域と大学が共に成長していくための橋渡しを担っています。

令和 5 年 10 月に、新しく「専門性の高い看護職育成部門」が加わり 5 部門となりました。地域の皆様からの要望をもとに、5 つの部門の活動を柱にして、大学の教職員が情報を発信しています。

## I 目的

看護研究交流センターは、看護科学における教育と研究の成果を地域に還元し、県民及び保健医療福祉関係者に対する学術支援ならびに生涯学習・研修支援活動を通して、県内の保健・医療・福祉の向上に貢献することを目的としています。

## II 各部門の主な活動内容

### 1. 地域社会貢献部門【いきいきサロン】【看護大・上教大連携公開講座】

地域の医療者・大学と地域住民の交流会である「いきいきサロン」と「上越教育大学との連携公開講座」を開催し、地域住民への学習の機会を提供している。

### 2. 看護職学習支援部門【看護職学習支援公開講座】【バーチャルカレッジ】

現職の看護師や潜在看護師のリカレント教育を推進する事業「どこでもカレッジプロジェクト」を主体に、県内の看護職への学びの機会を提供している。

### 3. 地域課題研究開発部門

【地域課題研究公募】【地域課題研究発表会】【上越地域看護研究発表会】

県内の保健・医療・福祉に携わる看護職を対象に本学教員と共同で行う研究を公募し、その成果報告会となる地域課題研究発表会や、上越地域の看護研究の発表の場である上越地域看護研究発表会の開催(上越地域振興局健康福祉環境部と共催)を担っている。

### 4. 特別研究部門

一般市民の健康の保持・増進や看護職の質的向上の推進の一助として貢献することを目的に、県内の保健医療看護上の課題に対応した研究課題を設定して取り組んでいる。

### 5. 専門性の高い看護職育成部門

専門性の高い看護職員の育成に向け、令和 5 年 10 月に発足した。上越圏域における専門性の高い看護職員の育成と定着を図るため、上越圏域看護部長会の活動支援を行うほか、新潟県看護協会と連携して「専門看護師フォローアップ研修」を開催した。

## III 事務局

### 1. 出前講座

本学教員の研究成果を地域へ還元する地域貢献活動の一環として実施している。

### 2. 卒業生支援

卒業生への支援事業として、相談窓口の開設、小規模会合に対する助成を行っている。

#### IV 令和7年度看護研究交流センター構成員

部 門	氏 名	職 名
	センター長 岡 村 典 子	基礎看護学教授
地域社会貢献部門	部門長 永 吉 雅 人	情報科学准教授
	関 睦 美	地域看護学准教授
	石 岡 幸 恵	成人看護学講師
	伊 藤 ひ かる	精神看護学助教
	野 村 優 希	地域看護学助手
	佐 藤 咲 子	成人看護学助手
	佐 藤 さ ゆ り	地域看護学助手
	金 井 系 未	基礎看護学助手
	小 嶋 優 香	精神看護学助手
看護職学習支援部門	部門長 伊 豆 上 智 子	看護管理学教授
	増 澤 祐 子	母性看護学・助産学准教授
	前 川 絵 里 子	地域看護学講師
	山 岸 美 奈 子	基礎看護学助教
	坂 田 智 佳 子	成人看護学助教
	五十畑麻奈美	母性看護学・助産学助教
	青 山 拓 夢	老年看護学助教
	佐 藤 咲 子	成人看護学助手
	金 井 系 未	基礎看護学助手
	野 村 優 希	地域看護学助手
地域課題研究開発部門	部門長 野 口 裕 子	地域看護学准教授
	山 田 恵 子	小児看護学准教授
	石 岡 幸 恵	成人看護学講師
	野 澤 祥 子	小児看護学助教
	谷 内 田 潤 子	基礎看護学助教
	塚 田 文 枝	母性看護学・助産学助教
	佐 藤 さ ゆ り	地域看護学助手
	小 嶋 優 香	精神看護学助手
特別研究部門	部門長 岡 村 典 子	基礎看護学教授
	伊 豆 上 智 子	看護管理学教授
	山 田 恵 子	小児看護学准教授
	樺 澤 三 奈 子	成人看護学准教授
	原 等 子	老年看護学准教授
	永 吉 雅 人	情報科学准教授
	野 口 裕 子	地域看護学准教授
	山 岸 美 奈 子	基礎看護学助教
	久 我 誠	事務局 長

部 門	氏 名	職 名
専門性の高い看護職 育成部門	部門長 岡 村 典 子	基礎看護学教授
	石 田 和 子	成人看護学教授
	小 長 谷 百 絵	老年看護学教授
	伊 豆 上 智 子	看護管理学教授
	原 等 子	老年看護学准教授
	樺 澤 三 奈 子	成人看護学准教授
	東 條 紀 子	老年看護学講師
	横 川 史 穂 子	成人看護学講師
センター事務局	筑 山 芳 江	看護専門職
	岸 田 友 希	事務職員
	松 原 友 美	事務職員

# 事業費

(単位：円)

I 各部門	
地域社会貢献部門	111,000
看護職学習支援部門	153,770
地域課題研究開発部門	384,690
特別研究部門	200,000
専門性の高い看護職育成部門	221,200
小計	1,070,660
II 地域課題研究助成	
2025年度助成 9件×100,000	900,000
小計	900,000
III 事務局	
管理・運営費	1,747,017
合計	3,717,677

## 令和7年度看護研究交流センター公開講座等実施報告

I 市民公開講座 いきいきサロン			
	日時	テーマ	参加人数
1回	5月15日(木) 18:30～19:30	放っておけない子どもの肥満 一家族で見直す食習慣ー 上越市健康づくり推進課 栄養士長 和久井 佳子	50
2回	6月19日(木) 18:30～19:30	腰痛と上手につきあってイキイキと暮らすには 新潟県立中央病院 整形外科部長 菊地 廉	167
3回	7月17日(木) 18:30～19:30	ゆる健康づくりのすすめ 新潟県立看護大学 准教授 徐 淑子	71
4回	9月18日(木) 18:30～19:30	がんを予防する健康的なライフスタイル 新潟県立看護大学 講師 横川 史穂子	76
5回	10月16日(木) 18:30～19:30	高齢者や認知症を持つ方の入院治療における課題：家族の方 に知っておいていただきたいこと 厚生連上越総合病院 老人看護専門看護師 竹内 真奈美	74
6回	11月20日(木) 18:30～19:30	乳幼児がおられる家庭における自然災害への備え 新潟県立看護大学 准教授 野口 裕子	42
合計 6回			480
II 看護職学習支援公開講座			
	日時	テーマ	参加人数
看護研究支援コース	5月10日(土) 13:00～16:00	さあはじめよう看護研究① 看護研究のテーマをみつけよう 新潟県立看護大学 教授 石田 和子	17
	6月7日(土) 13:00～16:00	さあはじめよう看護研究② 看護研究相談会 新潟県立看護大学 教授 石田 和子	9
	6月28日(土) 13:00～16:00	さあはじめよう看護研究③ 看護研究方法の理解ー量的研究 新潟県立看護大学 教授 高林 知佳子	11
	9月6日(土) 13:00～16:00	さあはじめよう看護研究④「医中誌 Web を用いた文献検索の 実際～文献検索の「困った！」を解決しよう～ 新潟県立看護大学 専門司書 吉原 貴子	3
	10月4日(土) 13:00～16:00	さあはじめよう看護研究⑤ 看護研究方法の理解ー質的研究 新潟県立看護大学 教授 大久保 明子	10
看護現場に活かすコース	7月12日(土) 13:30～16:00	バイタルサインを見直そう ～毎日の検温を“日課”から“ケア”に変える！～ 新潟県立看護大学 助教 山岸 美奈子 新潟県立看護大学 助教 相澤 達也	6
	7月26日(土) 13:30～16:00	根拠がわかる採血 ～モデルを使った演習でスキルアップ！～ 新潟県立看護大学 助教 池田 よし江 新潟県立看護大学 助教 金井 香織	5
	10月25日(土) 13:30～16:00	ケアの優先度を決める“看護のアセスメント”～明日から の実践に活かすフィジカルアセスメントと看護の臨床推論～ 新潟県立看護大学 客員教授 山内 豊明	47
	11月8日(土) 13:30～15:30	チーム力をアップさせるためのヒントを得よう！ ～ワークを通して得た体感から考える～ 新潟県立看護大学 教授 岡村 典子	8

合 計 9 回		116
<b>Ⅲ 新潟県立看護大学・上越教育大学連携公開講座</b>		
7 月 5 日(土) 13:30～15:30	「自分らしく、すこやかに生きるコツ」 “発酵のまち”のすこやか朝ごはん 上越教育大学 教授 光永 伸一郎 すこやかな“こころ”を保つために 新潟県立看護大学 講師 船山 健二 “子どもらしく”すこやかな育ちへ 新潟県立看護大学 准教授 山田 恵子	87
<b>Ⅳ 看護研究発表会</b>		
10 月 18 日(土) 12:30～16:10	令和 7 年度第 15 回上越地域看護研究発表会・2025 年地域課題研究 合同発表会	77
総 計 17 回		760

## 事業広報活動

### I 情報公開

- 令和7年度看護研究交流センター活動報告書発行 (250部)
- 2025年度看護研究交流センターガイドブック発行 (2,800部)
- 2025年度看護研究交流センター出前講座パンフレット発行 (1,500部)
- 2026年度地域課題研究公募要領発行 (1,700部)
- 看護研究交流センターホームページ掲載

### II 広報活動

広報内容	広報方法	
1. 看護研究交流センターガイドブック	関係機関へ発送	1300部
2. 令和7年度市民公開講座 いきいきサロン 第1回～6回	上越市広報誌「広報上越」5月号	一括掲載
	がんぎネット(上越地域包括ケア推進情報Webサイト)	各回掲載
	上越タイムス「くびきの創信」	各回掲載
	上越NIC・新潟日報「おはよう通信」	各回掲載
	上越ASAニュース	各回掲載
	上越よみうり伝言板	各回掲載
	JCV(上越ケーブルビジョン)MJ みんなの伝言板	各回掲載
	関係機関へチラシ送付 400部×6回	2400部
3. 令和7年度新潟県立看護大学・上越教育大学連携公開講座	がんぎネット(上越地域包括ケア推進情報Webサイト)	1回掲載
	関係機関へチラシ送付	1400部
4. 令和7年度看護職学習支援公開講座 第1回～9回	新潟日報9月「県からのお知らせ」	第8回掲載
	がんぎネット(上越地域包括ケア推進情報Webサイト)	各回掲載
	JCV(上越ケーブルビジョン)MJ みんなの伝言板	各回掲載
	関係機関へチラシ送付 1300部×9回	11700部
5. 令和7年度度第15回上越地域看護研究発表会・2024年度地域課題研究発表会 (合同開催)	新潟日報8月「県からのお知らせ」	1回掲載
	がんぎネット(上越地域包括ケア推進情報Webサイト)	各回掲載
	JCV(上越ケーブルビジョン)MJ みんなの伝言板	各回掲載
	関係機関へポスター送付	1300部
6. 2025年度出前講座	上越タイムス「くびきの創信」	一括掲載
	関係先へパンフレット発送	1000部

## II. 部門報告

## 地域社会貢献部門

永吉雅人、関睦美、石岡幸恵、伊藤ひかる、野村優希、  
佐藤咲子、佐藤さゆり、金井系未、小嶋優香

### I 本部門の事業目的

地域社会貢献部門では、地域住民の方々が健康でいきいきとした生活をするために、地域の保健・医療職および看護大学の教員から、健康に関するテーマについて話題提供をしてもらい、交流を図る機会として「いきいきサロン」を開催する。加えて、「上越教育大学と新潟県立看護大学との包括的な連携・協力に関する協定」（平成22年7月2日締結）に基づき、地域社会に貢献することを目的としてお互いの大学が持つ資源を活用して公開講座を開催する。

### II 事業の概要

#### 1. いきいきサロン

##### 1) 開催状況

今年度は、全6回を事前申込み制にて開催した。参加人数はテーマによって変動があり、特に第2回の「腰痛」をテーマにした回では167名と非常に多くの参加者を集めたが、全体としては各回42～167名、年間総計で480名、平成21年度から開始して以降の総参加者数は9,511人となった。広報活動では、今年度より「広報上越」への無料掲載が承認されたほか、「がんぎネット」等のウェブ情報も活用し、周知の強化を図った。

表1 開催日時およびテーマ・講師と参加人数

回	開催日	テーマ	講師	参加人数
第1回	5月15日 (木)	放っておけない子どもの肥満— 家族で見直す食習慣—	上越市健康づくり推進課 栄養士長 和久井佳子 先生	50
第2回	6月19日 (木)	腰痛と上手につきあって イキイキと暮らすには	新潟県立中央病院 整形外科部長 菊地廉 先生	167
第3回	7月17日 (木)	ゆる健康づくりのすすめ	新潟県立看護大学 准教授 徐淑子 先生	71
第4回	9月18日 (木)	がんを予防する健康的な ライフスタイル	新潟県立看護大学 講師 横川史穂子 先生	76
第5回	10月16日 (木)	高齢者や認知症を持つ方の 入院治療における課題	上越総合病院 老人看護専門看護師 竹内真奈美 先生	74
第6回	11月20日 (木)	乳幼児がおられる家庭における 自然災害への備え	新潟県立看護大学 准教授 野口裕子 先生	42

#### 2) 参加者のアンケート結果

##### (1) 参加者の年代

70歳代が159人(33.1%)と最も多く、次いで60歳代が140人(29.2%)、50歳代75人(15.6%)であった。一方、40歳代以下は30人(6.3%)であったが、第1回の「子どもの肥満」や第6回の「乳幼児の防災」など、テーマによっては20~40歳代の参加が一定数見られた。

(2) これまで参加した回数

「10回以上」が194人(40.4%)と最も多く、リピーター層に支えられている。次いで「1~5回」が98人(20.4%)であった。また、今年度の「初めて」の参加者は94人(19.6%)であり、特に第2回の「腰痛」や第6回の「防災」をテーマにした回で新規参加者が多かった。

(3) 周知方法(複数回答)

「ポスター・チラシ」によって参加した人が146人と最も多く、次いで「新聞広告」91人、「ガイドブック」87人、「市広報誌」62人の順であった。今年度から開始した「広報上越」への無料掲載や、大学ホームページ(49人)も一定の周知効果を上げている。

(4) 参加理由(複数回答)

「テーマに興味・関心があったから」が333人と圧倒的に多く、次いで「健康のため」172人、「毎回参加しているから」119人、「講師の先生のお話を聞いてみたかったから」119人の順であった。

(5) 講師の話についての感想

全体では、「非常にわかりやすかった」と回答した人が245人、「わかりやすかった」と回答した人が136人であり、肯定的な回答が全体の約8割以上を占め、高い満足度が得られた。ただし、第3回の内容については「専門的で少し難しかった」との意見も一部で見られた。

(6) 今後、とりあげてほしいテーマ(3つまでの複数回答)

「認知症」が112件と最も多く、次いで「心の病気・健康」107件、「血圧・心臓の病気」85件、「生活習慣病」71件、「肩こり・腰痛」52件の順に多かった。その他の自由記載では、睡眠、膝の痛み、不整脈、発達障害、防災の継続開催などの要望が挙げられた。

3) 企画および運営

(1) 企画実行メンバー

地域社会貢献部門のメンバーおよび看護研究交流センター事務局の計10名が企画から運営までを行った。チラシの作成・発送、新聞広告への掲載依頼、講師資料の印刷等は看護研究交流センター事務局が行った。

また、当日の運営では学生アルバイト4名を継続して雇用し、会場準備や受付・参加者の誘導を行った。

(2) 広報活動

看護研究交流センターの案内、リーフレットの発送、看護大いきいきサロン通信の発行(2回)、講座のチラシの作成と配布、大学ホームページでの情報公開、広報上越、NICかわら版、上越よみうり、上越ASAニュース、がんぎネットへの掲載、上越ケーブルビジョン(JCV) MJ みんなの伝言板のPRコーナーの活用を行った。

(3) 講師謝礼

学外の講師には1回1万円および交通費を支払った。

#### (4) 参加者への対応

感染対策としてのマスク着用は任意、事前申込み制とした。資料については、昨年同様、看護研究交流センターのロゴマークがついたクリアファイルに入れて配布した。

## 2. 看護大・上教大連携公開講座

今年度は本学が当番校（幹事校）となり、令和7年7月5日（土）に本学を会場として開催した。3名の講師によるリレートーク形式が定着し、良好な評価を得た。

- ・ テーマ： 「自分らしく、すこやかに生きるコツ」
- ・ 講師： 山田恵子先生（本学）、船山健二先生（本学）、光永伸一郎先生（上教大）
- ・ 運営： 当初予定していたノベルティ配布は、両大学のバランスを考慮し中止とした。

参加者は87名であり、70歳代が28.2%、60歳代（26.9%）、50歳代（19.2%）、80歳代以上（11.5%）、40歳代（9.0%）であった。昨年度と異なり、20歳代（1.3%）および30歳代（2.6%）の参加も見られた。男女比は、男性25.6%、女性70.5%であった。住居は上越市が92.3%、妙高市が3.8%、糸魚川市が2.6%であった。講座の参加理由は、興味・関心のあるテーマだった（73.1%）が最も多く、講師の話は、非常に良かった・良かったを合わせて89.8%と、概ね高い満足感を得られる結果であった。

## 3. 福祉・介護・健康フェア（上越市共催イベント）

2025年9月20日（土）高田城址公園オーレンプラザにおいて「福祉・介護・健康フェア」へ以下の内容で出展し、本部門として企画・運営について協力した。学生の活躍が来場者から好評を得たが、イベント時間の重複により「出張いきいきサロン」の参加者が少なかった点が次年度への課題となった。

- ・ 内容： 出張いきいきサロン、キッズ白衣体験、認知症サポーター養成講座、健康セミナーなど

## 4. 令和6年度の評価と今後の課題

### 1) いきいきサロン

・ 成果： 「地域の課題（上越・妙高・糸魚川）」や「若年層の関心」に沿ったテーマ設定を意識したことで、新規参加層の開拓に繋がった。

・ 課題： 参加者より、資料の文字サイズを大きくしてほしいという要望や、ポインターの視認性に関する指摘があった。また、依然として人気テーマ（腰痛等）に集客が偏るため、会場（ホール）の柔軟な運用（片側使用・両側使用の判断）を継続する必要がある。また、講師の顔写真掲載は、講師側の希望がある場合を除き、原則として行わない方針に変更している。

### 2) 看護大・上教大連携講座

- ・ 成果： 幹事校としての役割を果たし、リレートーク形式による円滑な運営ができた。
- ・ 課題： 次年度（2026年度）は上越教育大学が会場となるため、情報の共有と役割分担（チラシ作成等）を早期に確定させる必要がある。また、若年層の参加が少ないため、周知先の再検討が求められる。次年度のテーマおよび開催方法や講師の選定等について、

上越教育大学の担当者とオンライン会議を持ち、以下の内容を決定した。

令和8年度 看護大・上教大連携講座

幹事校・場所：上越教育大学

日程：令和8年7月11日（土）13:30～15:30（2時間）

テーマ：「自分らしく、すこやかに生きるコツ」（2028年度まで継続）

構成：リレートーク方式（講師3名：上教大2名、本学1名）

講師：上越教育大学 山口 美和 先生  
 上越教育大学 山縣 耕太郎 先生  
 新潟県立看護大学 横川 史穂子 先生

資料1ー令和7年度いきいきサロン通信第1号・第2号

公立大学法人 新潟県立看護大学 看護研究交流センター 地域社会貢献部門


## 看護大いきいきサロン通信

第16巻 第1号 2025年7月31日発行

「いきいきサロン」は、健康に関心のある地域の皆様と、看護や医療等の専門家との交流の場として、平成21年度から開催してきました。今回の通信では先日開催した第1回～第2回の内容と、第3回以降の予定をご紹介します。今後も皆様からのご要望や、健康に関する世の中の動き等に合わせ、いきいきと生活していくことを応援するテーマを準備しお待ちしております。

**第1回 5月15日**

放っておけない子どもの肥満  
—家族で見直す食習慣—




上越市  
健康づくり推進課  
栄養士長  
和久井 佳子 先生

本年度初回のサロンは、20代から80代までの幅広い年代の皆様からご参加いただきました。上越市の子どもの肥満の実態や子どもの発達に合わせた「食」の進め方などを分かりやすくお話いただきました。

皆様からのアンケートでは、『子どもの為だけでなく家族全員に当てはまる大事なお話を聞けた』、『苦しい食材を少しでも食べることを科学的に知ることが出来た』、『孫のために活かしたい』といったお声をいただきました。

**第2回 6月19日**

腰痛と上手につきあって  
イキイキ暮らすには



新潟県立中央病院  
整形外科部長  
菊地 廉 先生

本年度2回目のサロンには、非常に多くの皆さまからご参加いただきました。腰痛の基本的な理解に加え、腰痛の対処方法や予防方法などを楽しく、分かりやすくお話いただきました。

皆様からのアンケートでは、『ユーモアを交えてもらい楽しく聴講できた』、『腰痛のメカニズムが分かった。ようはうまくつきあうこと』、『何でもポジティブに考えることが大切だと感じた』、『まずは筋トレからはじめたい』といったお声をいただきました。

**【今後のいきいきサロン】** 各回 18:30～19:30 本学ホールにて ※事前申込制、参加費無料

日時	講師	テーマ
7/17(木)	新潟県立看護大学 准教授 徐 淑子 先生	ゆる健康づくりのすすめ
9/18(木)	新潟県立看護大学 講師 横川 史穂子 先生	がんを予防する健康的なライフスタイル
10/16(木)	厚生連上越総合病院 老人看護専門看護師 竹内 真奈美 先生	高齢者や認知症を持つ方の入院治療における課題—家族の方に知っていただきたいこと—
11/20(木)	新潟県立看護大学 准教授 野口 裕子 先生	乳幼児がおられる家庭における自然災害への備え

公立大学法人 新潟県立看護大学 看護研究交流センター 地域社会貢献部門

## 看護大いきいきサロン通信

第16巻 第2号 2025年10月16日発行

「いきいきサロン」は、健康に関心のある地域の皆様と、看護や医療等の専門家との交流の場として、平成21年度から開催してきました。今回の通信では先日開催した第3回～第4回の内容と、第5回以降の予定をご紹介します。今後も皆様からのご要望や、健康に関する世の中の動き等に合わせ、いきいきと生活していくことを応援するテーマを準備しお待ちしております。

**第3回 7月17日**

ゆる健康づくりのすすめ



新潟県立看護大学  
准教授  
徐 淑子 先生

本年度3回目のサロンには、71名の方にご参加いただきました。年齢を重ね様々なことが変化していく中で、ポジティブな捉え方や意味を見出すことの大切さなどをお話いただきました。

皆様からのアンケートでは、『自分らしい健康とは何か考えるきっかけにしたい』、『老いるという新しい経験をする、という考え方がスチキだと感じた』、『友人にも教えたい』といったお声をいただきました。

**第4回 9月18日**

がんを予防する健康的な  
ライフスタイル



新潟県立看護大学  
講師  
横川 史穂子 先生

本年度4回目のサロンには、76名の方にご参加いただきました。がんに関する豆知識などを説明いただいた後、がんを予防するための生活習慣やがん検診の大切さについて、クイズを交えながらお話いただきました。

皆様からのアンケートでは、『減塩が大切だと分かり、少しでも工夫してみようと思った』、『食事と運動の大切さがわかった』、『アルコールの量など家族と話してみる』といったお声をいただきました。

**【今後のいきいきサロン】** 各回 18:30～19:30 本学ホールにて ※事前申込制、参加費無料

日時	講師	テーマ
10/16(木)	厚生連上越総合病院 老人看護専門看護師 竹内 真奈美 先生	高齢者や認知症を持つ方の入院治療における課題—家族の方に知っていただきたいこと—
11/20(木)	新潟県立看護大学 准教授 野口 裕子 先生	乳幼児がおられる家庭における自然災害への備え

## 看護職学習支援部門

伊豆上智子、増澤祐子、前川絵里子、山岸美奈子、坂田智佳子、  
五十畑麻奈美、青山拓夢、佐藤咲子、金井系未、野村優希

### I 本部門の事業目的

新潟県内、特に上越地域の現職の看護師や潜在看護師の資質向上を目指し、様々な学習および研修の機会を提供する。このことにより看護職の資質向上をはかり、県民のヘルスケアの充実を目指す。

### II 2025年度の事業概要

看護職学習支援部門は、公開講座とバーチャルカレッジの2つの活動を通して、現職の看護師や潜在看護師のリカレント教育を推進する事業「どこでもカレッジプロジェクト」を実施している。今年度は、看護職向け公開講座の開催（9回）、バーチャルカレッジの運営、どこカレ通信の発行（2回）を行った。

#### 1. 看護職学習支援公開講座

今年度の公開講座は、看護研究支援コースと看護現場に活かすコースの2コース計10講座で構成したが、年度当初に講師都合により1講座の開催を中止した（表1参照）。昨年度から演習を含む講座を中心に本学を会場に集合研修を再開し、今年度のオンライン講義(Web会議システムを使用したライブ配信)は1講座(表1の講座名欄※が該当)であった。

看護研究支援コースの講座は延べ50名が受講した。各講座は地域課題研究の応募につながるよう開催時期を工夫し、研究方法を具体的に学ぶ講座を2講座実施した。「看護研究方法の理解：量的研究」は本学の高林知佳子先生、「看護研究方法の理解：質的研究」は本学の大久保明子先生にそれぞれ担当していただき、受講者の満足度は高く好評だった。「文献検索の実際」は昨年度の受講者の要望を受けて、受講者各自の関心に合わせて文献検索を進められる内容を中心に構成した。

看護現場に活かすコースは、日常の実践に活用しやすい内容や看護職の関心が集まるテーマで構成している。今年度開催した4講座は延べ66名が受講した。「バイタルサインを見直そう～毎日の検温を“日課”から“ケア”に変える！」は、昨年度に引き続いて本学の山岸美奈子先生と相澤達也先生に、「根拠がわかる採血～モデルを使った演習でスキルアップ！～」は、昨年度に引き続いて本学の池田よし江先生、今年度新たに金井香織先生にそれぞれ担当していただいた。両講座とも受講者個々の進度に合わせた演習が好評だった。今年度新たに実施した「ケアの優先度を定める“看護のアセスメント”～明日からの実践に活かすフィジカルアセスメントと看護の臨床推論～」は、本学客員教授(放送大学大学院)の山内豊明先生を講師に迎え、「チーム力をアップさせるためのヒントを得よう！～ワークを通して得た体感から考える～」は、本学の岡村典子先生に担当していただいた。両講座とも、提示される身近な事例や場面への対応を受講者自身が振り返りつつ学べる内容が好評だった。

今年度は、対面型開催の講座を大幅に増やし、開催した全講座で受講者の期待に応える内容を提供できたが、募集定員を設けたすべての講座で定員を下回る参加者数にとどまった。公開講座参加者を対象に実施している無記名のアンケートは、アンケート紙面の配付とアンケートフォームのURL(QRコードを含む)の配付により行っており、今年度は各講座を運営

する部門員が配付方法を決定して実施した。回答率は 35.2～100%で、受講した講座に対する満足度は総じて高かった。

公開講座参加者の声開催中止となったスキンケアを学ぶ講座は開催要望の多い内容を含むため、次年度は必ず開催できるよう調整する。県内の看護職の生涯学習を支援する学習機会の提供に引き続き取り組む。

表 1. 看護職学習支援公開講座開催実績

区分	講座名 (※: Web 開催)	開催日	参加者数	金額	講師(敬称略)
看護研究支援 5コース	さあはじめよう看護研究 「看護研究のテーマをみつけよう」※	5月10日(土) 13:00～16:00	17名	1,000円	新潟県立看護大学 教授 石田和子
	さあはじめよう看護研究 「看護研究相談会」	6月7日(土) 13:00～16:00	9名	1,000円	新潟県立看護大学 教授 石田和子
	さあはじめよう看護研究 「看護研究方法の理解－量的研究」	6月28日(土) 13:00～16:00	11名	1,000円	新潟県立看護大学 教授 高林知佳子
	さあはじめよう看護研究 「医中誌 Web を用いた文献検索の実際 ～文献検索の「困った!」を解決しよう～」	9月6日(土) 13:00～16:00	3名	1,000円	新潟県立看護大学 図書館専門司書 吉原貴子
	さあはじめよう看護研究 「看護研究方法の理解－量的研究」	10月4日(土) 13:00～16:00	10名	1,000円	新潟県立看護大学 教授 大久保明子
看護実践に活かす 5コース	バイタルサインを見直そう ～毎日の検温を“日課”から“ケア”に変える!～	7月12日(土) 13:30～16:00	6名	1,000円	新潟県立看護大学 助教 山岸美奈子 助教 相澤達也
	根拠がわかる採血 ～モデルを使った演習でスキルアップ!～	7月26日(土) 13:30～16:00	5名	2,000円	新潟県立看護大学 助教 池田よし江 助教 金井香織
	高齢者の脆弱な肌の悩みを考える ～事例を通して皮膚トラブルを解決してみよう～	9月27日(土) 13:30～15:30	中止	1,000円	新潟県立中央病院 皮膚・排泄ケア認定看護師 林 智子
	ケアの優先度を定める“看護のアセスメント” ～明日からの実践に活かすフィジカルアセスメントと看護の臨床推論～	10月25日(土) 13:30～16:00	47名	1,000円	新潟県立看護大学 客員教授 山内豊明
	チーム力をアップさせるためのヒントを得よう! ～ワークを通して得た体感から考える～	11月8日(土) 13:30～16:00	8名	1,000円	新潟県立看護大学 教授 岡村典子

## 2. バーチャルカレッジ

バーチャルカレッジは、本学の学習管理システム「どこでもカレッジ(通称どこカレ)」を用いて動画教材を視聴するオンデマンド学習を支援する会員制プログラムで、会員を「どこカレメイト(以下、メイト)」と呼称している。学習管理システム使用に本学規程による利用申請を要するため会員制であるが、メイト登録と学習管理システム利用は無料である。

今年度の公開講座の一覧に、昨年度の看護研究支援コース「文献検索の基本」と「文献検索の実際」、看護現場に活かすコースから「解剖生理から根拠を押さえたフィジカルアセスメ

ント～毎日の検温を”日課”から”ケア”に変える～」と「もう一度はじめから 根拠がわかる実践！採血」の動画教材を追加したことを案内した。今年度の公開講座のうち、「バイタルサインを見直そう～毎日の検温を“日課”から“ケア”に変える！～」の動画教材を作成した。

公開講座参加者アンケートでは、今年度からバーチャルカレッジへの要望や掲載を希望する内容について自由記述による回答を求めている。2025年度の公開講座参加者延べ116人の回答から寄せられた要望は「新生児、乳児、幼児の心肺蘇生法」1件であった。

動画教材化した公開講座は、講師に協力を依頼して承諾を得た後に参加者にも動画教材化の目的で録画する旨を説明して協力を得ている。また、オンデマンド学習用の動画教材であるため、視聴時の実践に適した内容を提供する観点から動画教材の使用期間は最長5年としてきた。教材に含まれる情報や専門知識の更新速度が年々早まっていることを鑑みて、今年度から過去3年度分の動画教材を視聴対象とする方針とした。動画教材の管理は、本学のDX推進に伴う情報システム等の更新や変更の決定を待って再開する。

### 3. どこカレ通信

どこカレ通信は、バーチャルカレッジの会員であるメイトに向けて、公開講座やバーチャルカレッジの案内、看護研究交流センターの活動紹介を目的として、看護職学習支援公開講座の開催時期を勘案して発行している。

今年度のどこカレ通信の発行実績を表2に示した。送付先は、県内看護職が就業する施設とメイトである。主な内容は、公開講座の実施状況の紹介と開催案内を中心に、地域課題研究の公募や研究発表会の案内、バーチャルカレッジの紹介、メイト登録の案内等を掲載し、年2回の発行とした。どこカレ通信は紙面発行するほか、本学リポジトリに収載して本学ホームページで公開し、本学看護研究交流センターホームページにも掲載している。

表2 どこカレ通信発行実績

号名	発行時期	送付部数	主な内容
56	8月	972	これから開催する公開講座の案内、開催した公開講座の終了報告
57	3月	897	公開講座の終了報告、次年度の看護職学習支援公開講座の紹介、バーチャルカレッジ新教材掲載の案内、メイト募集の案内

### 4. その他

#### 1) メイト獲得に向けた取り組み

メイト登録対象は、新潟県内在住の看護職で年齢は問わない。メイト登録には、本学の学修管理システムの使用に必要な本学規程による利用申請手続きが含まれており、学修管理システムを含む本学情報システムの管理上、2年ごとの更新制で運営している。メイト登録は、2023年度末に本学看護研究交流センターホームページ上に実装したWeb申請用の申込フォームから行えるようになり、登録者が希望する方法で登録手続きが進められるように、押印省略が承認された書類の提出は電子メールまたは郵送のいずれかを選べるようにした。メイト登録の新規申請は2024年度からWeb申請のみとし、学修管理システムを含む情報システム利用登録完了後に送付する利用者登録情報(ID、パスワード)とバーチャルカレッジ運用手順書は紙面を郵送している。

メイトの新規獲得に向けて、メイト以外も受講する公開講座時に紹介し、どこカレ通信にバーチャルカレッジの紹介と併せてメイト募集を案内して周知を図っている。今年度のメイト新規登録は9名、2026年2月末時点の登録数は44名である。更新年度を迎えた44名に更新案内を送付した。

次年度は、メイト登録数の増加に向けて、公開講座開催時のメイト募集案内と看護職学習支援公開講座のメイト先行申込特典を継続し、バーチャルカレッジの活用を含むメイトの学習支援について継続して取り組む。

## 2) 広報活動

看護研究交流センター案内（ガイドブック）の発送、本学ホームページへの公開講座開催案内の掲載、病院や施設へのチラシの送付など、積極的に情報を公開した。公開講座開催時には、参加者に向けてバーチャルカレッジとメイト登録の案内、次回の公開講座の紹介を行い、公開講座終了後の参加者アンケートにも設問を設定した。

看護職学習支援公開講座について、上越圏域の看護職の参加が少ない状況が続いており、2024年度から、専門性の高い看護職育成部門の活動を通じて上越圏域看護部長会での広報を継続している。昨年度はすべての公開講座に上越圏域の看護職が参加したが、今年度は達成できなかった。次年度も今年度の広報活動を継続する。

資料1—どこカレ通信第56号

## どこカレ通信 第56号

公立大学法人新潟県立看護大学看護研究交流センター 2025年8月発行

◆これから開催する看護職学習支援公開講座 皆様の参加をお待ちしています！

日時	形態	対象	テーマ・講師	定員	参加費	申込期間
10/4(土) 13:00~16:00	演習	卒業後2年以上	さあはじめよう看護研究⑤ 「看護研究方法の理解-質的研究」 新潟県立看護大学 教授 大久保 明子	3名	100円	8/27 9/24
10/25(土) 13:30~16:00	講義	卒業後2年以上	ケアの優先度を決める“看護のアセスメント” ～明日からの実践に活かすフィジカルアセスメントと看護の臨床推論～ 新潟県立看護大学 客員教授 山内 豊明	9名	100円	9/17 10/15
11/8(土) 13:30~16:00	講義 演習	卒業後3年以上	チーム力をアップさせるためのヒントを得よう！～ワークを通して得た体感から考える～ 新潟県立看護大学 教授 岡村 典子	3名	100円	10/1 10/29

**\*新潟県内の看護職**  
本学卒業生および修了生が対象です。

**\*耳より情報\***  
10/25は、看護部のフィジカルアセスメント実践を推進する教育活動を長年先導されている山内豊明先生放送大学大学院です。対象者の観察から健康問題を導くスキルを高めたい方へ。

～ 募集のお知らせ ～

### 2026年度地域課題研究 募集

**応募期間：令和7年9月1日～11月21日 正午**

本学の教員が共同研究者として一緒に研究に取り組めます。看護実践現場における看護研究の活性化と看護実践の向上を目指します。

研究期間：1年6か月  
研究助成金：10万円まで

詳しくは看護研究交流センターのホームページをご覧ください。

### 看護研究発表会開催のお知らせ

令和7年10月18日(土)：～：  
新潟県立看護大学 第1・2ホール  
**参加申込期間：8月25～10月3日**

2024年度助成の地域課題研究報告会を開催します。第15回上越地域看護研究発表会と同日開催です。

\*詳細は看護研究交流センターホームページをご覧ください。

新潟県立看護大学 看護研究交流センター (受付時間平日9:30～16:00)

〒953-0147 上越市新南町240番地 TEL・FAX: 025-526-2822

eメール: nirin@nigata.ac.jp ホームページ: http://www.nirin.jp/

## どこカレ通信 第56号

公立大学法人新潟県立看護大学看護研究交流センター 2025年8月発行

◆今年度の看護職学習支援公開講座の実施状況

＜看護研究支援コース＞

5月10日(土)13:00～16:00  
さあはじめよう看護研究①「看護研究のテーマをみつよう」Web  
新潟県立看護大学 成人看護学教授 石田和子先生

今年度の第1回目はオンライン講義を実施しました。参加者からは「仕事と研究、家庭での役割を遂行できる不安」との声がある一方で、「研究テーマを見つめる方法について理解できな(わかりやすい)講義であり、先生のもとで学んでみたい」と思ったという声も聞かれ、これから看護研究に取り組む方への第一歩を大きく後押しする機会となりました。

6月7日(土)13:00～16:00  
さあはじめよう看護研究②「看護研究相談会」  
新潟県立看護大学 成人看護学教授 石田和子先生

第2回公開講座は講義と演習を交えて実施しました。研究内容について、参加者一人一人に具体的な研究事例を交えながら助言をいただき参加者からは、「事例をききながら、他の人の研究アイデアも聞けて学びになった」「悩んでいた点が明確になったので良かった」「研究はわからないことも多いですが、石田先生の講義を聞いてやれそうなきがしました」という声も聞かれ、研究の取り組みを促進させる貴重な講座となりました。

6月28日(土)13:00～16:00  
さあはじめよう看護研究③「看護研究方法の理解-量的研究」  
新潟県立看護大学 地域看護学教授 高林知佳子先生

第3回公開講座は講義と演習を交えて実施しました。量的研究の統計方法について、統計ソフト(SPSS)やエクセルを使用した演習が行われました。参加者からは「量的研究とSPSSの基本的な理解ができました」「結果の解釈など、難しく感じることもありましたが量的研究に少しは近づけた気がします」「先生が面白くて楽しくできました」という声も聞かれ、量的研究の理解を深めた講座となりました。

＜看護現場に活かすコース＞

7月12日(土)13:30～16:00  
バイタルサインを見逃さず～毎日の検温を「日課」から「ケア」に変える！～  
新潟県立看護大学基礎看護学助教授 山岸美奈子先生  
成人看護学助教授 相澤 達也先生

第4回公開講座は、講義と演習を交えて実施しました。「バイタルサイン測定時に使用する看護技術について山岸先生より観察方法と観察した所見から疑わしい状態や疾患を中心に、分かりやすく講義いただきました。シミュレーターを用いた演習では、お二人の講師が参加者の手技の支援や解説を行いながら、参加者は呼吸や心音の聴取を行いました。参加者からは、「呼吸音の正常と異常を確認することができた」「基礎から説明を受けたことで、普段の技術を再確認することができた」という声も聞かれ、看護技術のブラッシュアップにつながる機会となりました。

どこカレメイト 募集 どこでもカレッジプロジェクト- パーチャルカレッジ

パソコンやスマホからログインして学習ができる登録会員「どこカレメイト」を募集しています。過去の公開講座について一部動画を掲載しておりますので、学習にご利用いただけます。【申込方法】右のQRコードまたは看護研究交流センターのホームページからお申込みください。

資料2—どこカレ通信第57号

## どこカレ通信 第57号

公立大学法人新潟県立看護大学看護研究交流センター 2026年3月発行

—2026年度看護職学習支援公開講座の予定—  
下記の対象の方であれば、経験年数を問わず、どなたでも参加できます。

◆看護研究支援コース ※会場の変更が生じる場合があります。

日時	形態 会場	対象	テーマ・講師	定員 (人)	受講料 (円)	申込 期間
5月30日(土) 10:00～16:00	講義 第2ホール	新潟県内 在住・在勤 の看護職	字ばう1 看護研究の基礎 新潟県立看護大学 教授 石田 和子	30	2,000	4/22(土) ～ 5/20(土)
9月12日(土) 13:00～16:00	講義 演習 第2ホール	本学卒業 生・修了生	看護研究方法の理解-質的研究 新潟県立看護大学 教授 大久保 明子	30	1,000	8/5(土) 9/2(土)

◆看護現場に活かすコース ※会場の変更が生じる場合があります。

日時	形態 会場	対象	テーマ・講師	定員 (人)	受講料 (円)	申込 期間
5月23日(土) 13:30～16:00	講義 演習 基礎看護学 実習室		リアルな患者と学ぶ呼吸器・心音の基礎と実践 ～正常と異常を聞き分ける力をつける～ 新潟県立看護大学 助教 山岸 美奈子 新潟県立看護大学 助教 杉山 晶	15	1,000	4/15(土) ～ 5/13(土)
7月25日(土) 13:30～15:30	講義 第2ホール	新潟県内 在住・在勤 の看護職	高齢者の認知症の悩みを考える ～事例を通して皮膚トラブルを解決してみよう～ 新潟県立看護大学 助教 林 智子	50	1,000	6/17(土) ～ 7/15(土)
10月24日(土) 13:30～16:00	講義 第2ホール	本学卒業 生・修了生	実践に活かす！食災の現場から ～臨床推論に基づくフィジカルアセスメント～ 新潟県立看護大学 客員教授 山内 豊明	80	1,000	9/16(土) 10/14(土)
11月28日(土) 13:30～15:30	講義 演習 基礎看護学 実習室		“食べる”を支える看護実践 ～高齢者の摂食・嚥下の特徴と安全な食事介助～ 新潟県立中央病院 副院長/臨床看護学認定看護師 柴原 広美	35	1,000	10/21(土) 11/18(土)

＜申込方法＞  
開催日時、申込期間をご確認のうえ、看護研究交流センターホームページ【看護職学習支援公開講座】の申込フォーム、または右のQRコードからお申込みください。

\*各講座の詳細は、看護研究交流センターホームページの【看護職学習支援公開講座】に随時掲載しています。

◆どこカレメイトの募集 どこでもカレッジプロジェクト- パーチャルカレッジ  
パソコンやスマホからログインして、いつでもどこでも学習ができる登録会員「どこカレメイト」を募集しています。公開講座の動画を掲載し、皆様の学習の支援を行っています。  
【申込】右のQRコードまたは看護研究交流センターのホームページからお申込みください。

公立大学法人新潟県立看護大学 看護研究交流センター (受付時間平日9:30～16:00)

〒953-0147 上越市新南町240番地 TEL・FAX: 025-526-2822

eメール: nirin@nigata.ac.jp ホームページ: http://www.nirin.jp/

## 地域課題研究開発部門

野口 裕子、山田 恵子、石岡 幸恵、野澤 祥子、  
谷内田潤子、塚田 文枝、佐藤さゆり、小嶋 優香

### I 本部門の事業目的

本部門の事業目的は、新潟県の保健・医療・福祉分野で働く看護職の実践現場における研究活動を支援することを通じて、新潟県の看護の質向上をめざすことである。

### II 活動状況

#### 1. 県全域における看護研究の促進

##### 1) 地域課題研究助成

##### (1) 継続研究課題に対する助成（表1）

新潟県内の保健医療福祉機関において看護実践に携わる看護職を対象とし、看護実践上の問題や課題の解決を目指して行われる看護研究に対する助成を実施している。今年度には、計15件の地域課題研究に対する助成を行い、その継続を目指して本学教員が学内共同研究者として研究支援をサポートしている。

表1. 2025年度 地域課題研究助成 一覧

年度	研究代表者	所属	本学共同研究責任者	研究テーマ
2025年度	立川由紀子	見附市民病院	石岡 幸恵	地域施設の協力医療機関としての病院における看護師の緩和ケアに関する認識と課題
	大家あずさ	南魚沼市民病院	谷内田潤子	弾性ストッキングの着脱方法に関する看護師の知識と実践の実態調査
	山田 希	長岡赤十字病院	石田 和子	がん治療への期待が強い患者へ最期まで本人らしく生きることを支える看護
	早川由紀美	長岡赤十字病院	相澤 達也	急性心筋梗塞により緊急 PCI を受けた患者の体験 ～病名告知から IVR 室退室までに焦点をあてて～
	武田 織枝	吉岡内科クリニック	小林 綾子	A 地域における災害時の糖尿病療養支援に携わる看護師の役割
	傳谷 典子	介護老人保健施設 サンプラザ長岡	小長谷百絵	高齢者施設に勤務する医療・福祉職のストレスに関する研究
	田中 浩之	新潟県立中央病院	伊豆上智子 岡村 典子	上越圏域の看護管理者が、各施設の枠を超えて地域の課題に取り組むことが可能となった要因
	柳森 弥生	新潟病院附属看護学校	岡村 典子	腰痛のない看護師が取り組んでいる具体的な腰痛予防対策の実態
	丸山 芽吹	さいがた医療センター	大久保明子 野澤 祥子	アドバンス・ケア・プランニングに関する看護師の認識と課題
2024年度	佐久間結衣	長岡赤十字病院	樺澤三奈子	化学療法を受ける肺がん患者の在宅における感染予防行動の実態と行動の動機に関する研究
	星野貴美子	長岡赤十字病院	小林 宏至 大久保明子	NICU 入院児の母親が抱く授乳や搾乳時の不快感の現状と課題
	源川 雅斗	長岡赤十字病院	小林 綾子	顎矯正手術を受け術後顎間固定を受けた患者の術前の思いと手術に向けた看護介入の検討
	水澤真由美	新潟県立中央病院	岡村 典子	看護提供方式による新人教育への影響
	霜田 章子	上越総合病院	船山 健二 永吉 雅人	外来看護業務量データに基づいた外来人員配置の検討
2023年度	柳澤美直代 <sup>注1</sup>	藤田企画グループ ホーム癒しの家	東條 紀子	認知症対応型共同生活介護における医師不在時の ICT を活用した遠隔看取りの実践

（注1）2023年度地域課題研究6件のうち、止むを得ない事情により、令和7年度まで研究期間延長が認められた1件を掲載

## (2) 新規研究課題の公募（表 2）

2026 年度地域課題研究の公募を 11 月 21 日（金）に終了した。9 件の助成交付申請があり、審査の結果、9 件が採択された。12 月 23 日（火）にオンラインにて地域課題研究オリエンテーションを行った。2026 年 3 月 3 日（火）の研究計画書の提出をめざし、研究代表者および研究メンバーが、本学共同研究者である教員のサポートを受けて研究計画を検討中である。

表 2. 2026 年度地域課題研究助成 交付決定課題一覧

年度	研究代表者	所属	本学共同研究責任者	研究テーマ
2026 年度	南雲恵美	新潟県立中央病院	石岡 幸恵	入院中における医療用麻薬自己管理が進まない要因一病棟薬剤師、病棟看護師の認識調査から
	倉品和美	見附市立病院	石田 和子	生活・暮らしを支えるための情報共有を行うための、地域包括ケアシステムの役割発揮を目指す ICT 活用の課題と解決策
	立谷佐知子	厚生連上越総合病院	岡村 典子	地域医療構想のもと移管となった部門における看護師間の協働について
	河合夏海	長岡赤十字病院	坂田智佳子	大腿骨近位部骨折患者への二次性骨折予防パンフレットが退院後 1 年間の服薬継続率に及ぼす影響
	鍋田千尋	総合リハビリテーションセンターみどり病院	関 睦美	病棟看護師における ACP 実践の阻害要因
	吉田民子	新潟県立妙高病院	山岸美奈子	地域の小規模病院における病棟環境が若手看護師に与える影響～先輩看護師と新人看護師へのインタビュー～
	吉田真未	長岡赤十字病院	石田 和子	血液造血管器疾患患者が体験する味覚変化症状とその対処法の分類
	竹内真奈美	厚生連上越総合病院	東條 紀子 原 等子	在宅介護支援専門員が急性期病院からの退院事例に関わる困難感～急性期病院に求める退院調整や支援に対する期待を探る～
	帆苺千絵	まるごと訪問看護ステーション	小長谷百絵 原 等子	地域在住高齢者の支援拒否への対応に関する事例研究

## 2) 地域課題研究発表会の開催（図 1, 表 3）

10 月 18 日（土）に本学の会場参加とオンラインを併用したハイブリッド形式にて、2025 年地域課題研究発表会（2022 年度・2023 年度・2024 年度研究報告）を開催した。この発表会は、新潟県上越地域振興局健康福祉環境部との共催による、上越地域看護研究発表会との合同企画である。実行委員会は上越地域の 7 病院の看護職と共催者で構成され、本部門では、企画、抄録作成、参加募集、企業展示 2 件の手配を含む準備と、当日の発表会の運営を担った。

地域課題研究発表会では、地域課題研究 6 件、上越地域看護研究 8 件、計 14 件の口頭発表が本学会場にて行われた。参加者は計 77 名（前年度 71 名）、内訳として会場参加者は 55 名（前年度 54 名）、本学教員 11 名、オンライン参加者 11 名（前年度 17 名）であった。

## 2. 上越圏域における看護研究の促進（図 1）

新潟県上越地域振興局健康福祉環境部との共催により、10 月 18 日（土）に本学の会場参加とオンラインを併用したハイブリッド形式にて、上越地域看護研究と地域課題研究の合同発表を開催した。実行委員会は、上越地域の 7 病院の看護職と共催者で構成され、上越地域看護研究発表会の演題については、本部門で査読を担った。

地域課題研究発表会での参加者数は、前項 2) で前述のとおりである。合同発表会後のア

ンケートでは、全員が発表会への参加について満足・やや満足と回答した。(n=36)。

### Ⅲ. 事業の評価と今後の課題

次年度の地域課題研究発表会は、2026年10月17日(土)、上越地域看護研究との合同開催を予定している。地域課題研究発表会・上越地域看護研究発表会への会場参加者増員のため、次年度は対面形式で開催する。

また、広報活動として、看護職学習支援部門および専門性の高い看護職育成部門との連携に基づく看護研究の推進、公募要領の郵送や対面配布に引き続き尽力するとともに、次年度には、「広報 上越」への研究発表会開催案内の掲載を計画している。

発表者による機器操作のトラブルの防止や緊張による心理的負担の軽減のため、昨年度から導入した、発表操作のサポートを担う研究メンバーの登壇の許可や発表終了時間をランプで知らせるスピーチタイマーランプの導入が好評であったため、次年度も継続して行う。



図1. 第15回上越地域看護研究・2024年地域課題研究 合同発表会の様子

表 3. 第 15 回上越地域看護研究発表会 2025 年地域課題研究発表会 合同発表会プログラム

時 間	第 2 ホール
12:00	開場、Zoom 入室
12:30～12:40	開会：上越地域振興局健康福祉環境部長・新潟県立看護大学長あいさつ
12:40～13：32	<p><b>演題発表【A-1 群：上越地域看護研究】</b>            座長：本間富美子（独立行政法人国立病院機構さいがた医療センター）</p> <p><b>演題 1</b> 関口 渚（新潟県立柿崎病院）            慢性閉塞性肺疾患の患者と家族の退院先への思いに違いがある患者の受容過程－フィンクスの危機モデルによる分析</p> <p><b>演題 2</b> 佐藤史奈（新潟県上越地域振興局健康福祉環境部）            A 保健所で実施している高校生対象の「思春期からの健康づくり講座」の紹介～令和 6 年度の取組より～</p> <p><b>演題 3</b> 保坂美由紀（医療法人常心会川室記念病院）            転倒予防に向けた運動機能向上トレーニングの効果</p> <p><b>演題 4</b> 山川友美（新潟県立妙高病院）            院内デイケアへの参加が認知症を持つ入院患者と病棟看護師に及ぼす影響</p>
13:35～14:15	<p><b>演題発表【B-1 群：地域課題研究】</b>            座長：野口裕子（新潟県立看護大学）</p> <p><b>演題 1</b> 柳澤美直代（有限会社藤田企画グループホーム癒しの家）            認知症対応型共同生活介護における多職種連携による在宅見取りへの支援－情報通信機器（ICT）を活用した遠隔死亡診断を含めた在宅見取り体制構築に向けた事例研究－</p> <p><b>演題 2</b> 星野貴美子（日本赤十字社長岡赤十字病院）            NICU 入院児の母親が抱く授乳や搾乳時の不快感の現状と課題</p> <p><b>演題 3</b> 源川雅斗（日本赤十字社長岡赤十字病院）            顎矯正術後顎間固定を受けた患者の術前・術後の思いと看護支援の検討</p>
14:15～14:30	休憩（15 分）
14:30～15:22	<p><b>演題発表【A-2 群：上越地域看護研究】</b>            座長：深澤ますみ（新潟県立妙高病院）</p> <p><b>演題 5</b> 塚田瑞仁（新潟県立柿崎病院）            誤嚥性肺炎を繰り返す患者に対し、理学療法士と連携し誤嚥防止の援助を行い施設退院した一症例</p> <p><b>演題 6</b> 田巻玲於奈（新潟県立柿崎病院）            脳梗塞の終末期において、自宅退院を希望する患者の思いに寄り添い、多職種で支援し実現した一例</p> <p><b>演題 7</b> 山口真里（新潟県厚生農業協同組合連合会糸魚川総合病院）            せん妄に対する認知症マフの効果</p> <p><b>演題 8</b> 鈴木陽子（医療法人知命堂病院訪問看護ステーション）            訪問看護における在宅療養者の内服管理～服薬カレンダーに関するインシデントの SHELL 分析と業務改善に向けた取り組み～</p>
15:25～16:05	<p><b>演題発表【B-2 群：地域課題研究】</b>            座長：石岡幸恵（新潟県立看護大学）</p> <p><b>演題 4</b> 霜田章子（新潟県厚生農業協同組合連合会上越総合病院）            外来看護業務量データに基づいた外来人員配置の検討</p> <p><b>演題 5</b> 佐久間結衣（旧姓村越）（日本赤十字社長岡赤十字病院）            化学療法を受ける肺がん患者の在宅における感染予防行動の実態と行動の動機に関する研究</p> <p><b>演題 6</b> 水澤真由美（新潟県立中央病院）            看護提供方式による新人教育への影響</p>
16：05～16：10	閉会：新潟県立看護大学看護研究交流センター長

## 特別研究部門

岡村典子、伊豆上智子、山田恵子、樺澤三奈子、原等子、永吉雅人、  
野口裕子、山岸美奈子、久我誠

### I 本部門の事業目的

新潟県内の保健医療看護上の課題に対応した研究課題を設定して取組み、一般市民の健康の保持・増進や看護職の質的向上の推進の一助として貢献することである。

### II 2025年度の事業概要

2023年度から取り組んだ研究は、一昨年12月に開催された第44回日本看護科学学会学術集会にて発表した。この研究にて、新潟県内の病院施設において看護研究への取組みは行われていること、また支援体制も概ね整っていること等が分かった。現在、投稿に向けたデータ分析を進めているところである。

また、新たに取り組む研究課題として、卒業生のキャリア及び学修支援に関するニーズ調査を計画している。他大学も同様の調査を実施しており、現在はそれらの先行研究を探索し、詳細な内容の検討を進めている。この研究課題については、メンバーを部門長に限定せず、各部門からの推薦・自薦にてメンバーを募った。

### III 今後の取組み

2023年度に取り組んだ研究の結果は、引き続き看護研究交流センターの看護職学習支援部門、地域課題研究開発部門の活動に反映させるとともに、学会誌や紀要に投稿する。

また、新たに取り組む研究課題については、本学の同窓会とも連携をとり、調査への協力者確保に努めていく。

## 専門性の高い看護職育成部門

岡村典子、石田和子、小長谷百絵、伊豆上智子、原等子、樺澤三奈子、  
東條紀子、横川史穂子

### I 本部門の事業目的

専門性の高い看護職員の育成に向け、行政（県）や新潟県看護協会、医療機関等の関係機関とともに連携して取り組む。

活動内容として、①上越圏域看護部長会の活動支援、②専門看護師のネットワーク支援（新潟県看護協会と連携）、③その他 専門性の高い看護職育成に必要と認められる事業、の3つがある。

### II 2025年度の事業概要

今年度は、部門会議を年2回開催した。主となる二つの活動については、リーダーとなる部門員の主導により活動の計画・実施を円滑に進めることができた。

#### 1. 上越圏域看護部長会の活動支援

今年度の活動支援として、二つ挙げられる。一つは、昨年度実施した“上越圏域の看護部長が考える（理想とする）看護師長像の明確化と共有”により明らかとなった、上越圏域において期待する“看護師長像”の育成に向けた研修を実施した。「人が育ち、人を育てる”上越圏域看護職研修 ～看護管理者編～」をテーマに、全5回の研修（2025年3月～2026年3月）が本学を会場に開催され、上越圏域の看護管理者（看護師長、主任等）40名前後が参加した。

二つ目として、昨年度と同様に、新任期看護職員（階層レベル、ラダーI相応）を対象とした「フィジカルアセスメント研修」、及び昨年度のフィジカルアセスメント研修に参加した看護師の「フォローアップ研修」の支援である。前者の研修企画・運営に、本学の成人看護学領域・相澤達也助教、基礎看護学領域・山岸美奈子助教が携わった。どちらの研修も、本学を会場に開催された。また、「フィジカルアセスメント研修」では、本学の学生の見学も可能とのことで、参加者を募ったが今回はいなかった。

#### 2. 専門看護師のネットワーク支援

「専門看護師フォローアップ研修」は、新潟県看護協会と共催にて、「コンサルテーション」をテーマに開催し、講義およびシンポジウムともに好評であった。参加者からは、経験豊かな専門看護師による講義や県内で活躍する専門看護師の発表から学びを得ることができ、日々の活動に活用したいとの声が寄せられた。また、昨年度と同様に、県内の3つの大学院（新潟大学、新潟青陵大学、新潟医療福祉大学）の研究科長、分野長宛てにメールにて研修のご連絡をするとともに、開催要項を送付し周知を図った。さらに、県内の大学院修了生の場合は、県外にて勤務していても参加を可とし、4名の参加があった。

### III 今後の取り組み

「上越圏域看護部長会の活動支援」については、看護管理者の育成に向けた研修開催を含む活動の企画や運営の支援を引き続き行っていくとともに、新任期看護職員を対象とした研

修についても協力していく。

「専門看護師のネットワーク支援」については、これまでの研修を通じて県内の専門看護師で顔の見える関係が構築されつつあることを踏まえ、仲間づくりを目的としたグループワークの見直しが提案されている。今後は、その時間をシンポジウムでのディスカッションに充てるなど、柔軟な交流の機会をつくることを検討する。また、研修内容は実務への還元が期待できることから、近隣の看護師や本学教員への周知についても検討すべきとの意見があり、取り組む予定である。

### Ⅲ. 事務局報告

## 令和7年度出前講座実施報告

### I 出前講座実施状況（開催順）

	開催日	テーマ	講師名	依頼団体	参加人数
1	6月30日(月)	認知症のある生活に備える	原 等 子	北本町町内会	32
2	7月3日(木)	職場における心の健康づくり	久保野裕子	上越市男女共同 参画推進センター	26
3	8月5日(火)	日常生活で活かすストレス対処法 ～ストレスに強くなる考え方と伝 え方を学ぼう～ 第1回認知行動 療法で考え方を直す	谷本千恵	田園サロン	19
4	8月6日(水)	精神疾患ここが知りたい！	船山健二	聖上智オリーブ こども園	15
5	9月8日(月)	人生100年時代を生き抜く知恵： 異文化から学ぶ	中村義実	サンクスたんぼぼ	20
6	9月25日(木)	職場における心の健康づくり	久保野裕子	介護老人保健施設 くびきの	23
7	9月30日(火)	認知症のある生活に備える	原 等 子	介護老人保健施設 はねうまの里	11
8	10月7日(火)	認知症のある生活に備える	原 等 子	糸魚川消費者協会	16
9	10月9日(木)	日常生活で活かすストレス対処法 ～ストレスに強くなる考え方と伝 え方を学ぼう～第1回認知行動療 法で考え方を直す	谷本千恵	糸魚川市上南地区 公民館	19
10	10月16日(木)	日常生活で活かすストレス対処法 ～ストレスに強くなる考え方と伝 え方を学ぼう～第2回アサーショ ンで良好なコミュニケーションを 築く	谷本千恵	糸魚川市上南地区 公民館	18
11	10月17日(金)	職場における心の健康づくり	久保野裕子	介護老人保健施設 くびきの	23
12	10月17日(金)	認知症のある生活に備える	原 等 子	上越市社会福祉協 議会清里支所	15
13	2月21日(土)	人生100年時代を生き抜く知恵： 異文化から学ぶ	中村義実	子どもに学ぶ教師 の会 直江津	8
総参加人数					245

## II 出前講座実施結果

### 1) 講座内容について

非常によかった	12 件
良かった	1 件
どちらともいえない	0 件

### 2) 感想、意見（順不同）

・企画の意図を汲みとって講和いただき、参加者の意識啓発になりました。内容が具体的であり、質疑にも丁寧にお答えいただき、理解が深まりました。機会があれば再度お話を聞きたいと思います。

・ストレスの要因、対処方法等を大変分かりやすく教えていただき、自分自身の問題として考えることができました。講座をきっかけに、職場での人間関係、接遇等の解決の糸口になればと思います。

・とても興味深く、かつ有意義な時間を過ごせました。継続的な学びの必要性を感じました。丁寧にお話しいただきましたが、高齢者にはややレベルが高かったなと感じました。

・資料の文字を大きくしていただいたり、分かりやすく教えていただき、2回のシリーズを間隔をあけずに学べました。日常生活で活用出来そうです。

・認知症に対する誤解や偏見を減らし、正しい知識を広めることで本人や家族、介護者の負担軽減につながるなど、実践的な学びが得られ、日常に活かせる情報を得ることができました。

・認知症になったらどうしようと不安を抱えて生活をしていると思いますが、そういう不安を取り払ってくれるようなお話でした。高齢者にも分かりやすく、楽しく聞くことができました。

・明るく笑顔で話していただき分かりやすかったです。具体的な事例や資料もあり、帰宅後読み直すことができました。介護経験があるので、周りの認知症の方々に少しでも力になって楽しい毎日が送れるように活かしていきたいと思います。

・認知症の予防ばかり気にしていたが、なった場合の心構えや家族の対応など学ぶことが出来ました。

・海外の話はとても興味深かったです。普段何気に見ている風景や看板等を考えることの重要性、アハ・モーメントの重要性を感じました。

・受講者は学校教員や地域活動を行っている方々で、関心の高いテーマでした。内容や具体例も豊富であり、4つのトピックごとに受講者が少し考える時間もありました。受講者の感想は「お話を聞いて、たいへん良かった」という声にあふれていました。スクリーンに投影してお話と、持ち帰りの資料もいただき、受講者への配慮が行き届いてありがたかったです。人生100年時代を「青春とは」で締め括った講義は印象深かったです。

### 3) その他

- ・メールで申請等ができ利便性が高く丁寧に対応していただきました。
- ・利用に際し分かりやすく教えていただき助かりました。

- ・ 出前講座のよき、ありがたさが分かりました。地域にとってはよい企画であり、勉強の機会になります。今後もこの事業の継続を望みます。
- ・ 日頃、お聴きできない講義を講師自らお越し頂き、大変有意義でありがたい企画であると思います。もっと多くの人に聞いてほしいので、今後もこのような学習会を希望します。
- ・ 若い年代の方にも参加していただきたかったのですが、平日だとどうしても高齢者のみの参加となってしまいます。
- ・ 今後も利用を検討していきたいので、継続していただきたいと思います。
- ・ 来年も講座を受けたいと考えています。

## IV. 2024 年度地域課題研究助成報告 及び研究成果報告

1. 柳澤 美奈代：有限会社藤田企画 グループホーム癒しの家  
(2023 年度)
2. 佐久間 結衣：日本赤十字社 長岡赤十字病院
3. 源川 雅斗：日本赤十字社 長岡赤十字病院
4. 霜田 章子：新潟県厚生連 上越総合病院
5. 星野 貴美子：日本赤十字社 長岡赤十字病院
6. 水澤 真由美：新潟県立中央病院

新潟県立看護大学看護研究交流センター2024年度地域課題研究 研究助成報告

1. 研究名

認知症対応型共同生活介護における多職種連携による在宅看取りへの支援－情報通信機器（ICT）を活用した遠隔死亡診断を含めた在宅看取り体制構築に向けた事例研究－

2. 研究代表者

柳澤 美直代 有限会社藤田企画グループホーム癒しの家

3. 共同研究者

なし

4. 本学共同研究者

新潟県立看護大学 講師 東條 紀子  
同上 准教授 原 等子

5. 研究助成金執行報告（単位：円）

予算額	100,000				
執行額	旅費	報償費	役務費	需用費	合計
	0	0	0	99,925	99,925

6. 研究成果の公表

日本認知症ケア学会

# 認知症対応型共同生活介護における多職種連携による在宅看取りへの支援 —情報通信機器（ICT）を活用した遠隔死亡診断を含めた 在宅看取り体制構築に向けた事例研究—

柳澤美直代<sup>1)</sup>, 東條紀子<sup>2)</sup>, 原 等子<sup>2)</sup>

1) 有限会社藤田企画 グループホーム癒しの家 2) 新潟県立看護大学

キーワード：認知症対応型共同生活介護 在宅看取り 遠隔死亡診断

**【目的】** 認知症対応型共同生活介護（以下、GH）における多職種連携による在宅看取りへの支援について事例の経過を分析し、情報通信機器（ICT）を活用した遠隔死亡診断（以下遠隔死亡診断とする）を含めた在宅看取り体制構築の過程を明らかにする。

**【方法】** 事例の看護記録・介護記録を対象に、遠隔死亡診断に関わる体制整備の経過とともに、遠隔死亡診断の同意を得た本人含む、家族、関わった職種、連携の経過を追い質的に分析・整理した。倫理的配慮として、研究対象者に対し、口頭および文書にて研究の主旨、研究参加の自由意思、匿名性の確保、研究結果の公表等について説明し、同意書の署名をもって承諾を得た。また新潟県立看護大学倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号 024-09）。

**【結果】** 3事例の死亡診断は医師による直接死亡診断となった。その1事例を報告する。

**1. 入居時から看取りの意思表示まで：**事例 80歳代女性、アルツハイマー型認知症。対象者は夫婦で入居し、入居10年後に夫を看取った。その後、経年的に重度化する中、米寿の祝いが開催された。この際、家族から「祖父のようにGHで看取りたい」との希望が示され、看取りの意思が確認された。

**2. 死期が近づく時期から臨死期：**米寿の祝いから一か月後、さらに身体機能が低下し、皮膚疾患を発症し、介護職員は緩和ケアに向け取り組んだ。この間、家族は頻回に面会に訪れ、介護職員との連携が深まった。臨死期には傾眠となったが、声掛けには頷くなど反応を示し、最期は家族と介護職員に看取られながら永眠した。死亡時は医師が在駐していたため、直接の死亡診断が行われた。

**3. 多職種連携と ICT を活用した体制構築：**専門看護師は、「医師による遠隔での死亡診断をサポートする看護師を対象とした研修」を受講した後、診療所に常駐する医師に「情報通信機器（ICT）を利用した死亡診断ガイドライン」を説明し遠隔死亡診断のGHとしての体制構築を整備した。遠隔死亡診断の実施については、協力医、外来看護師、薬剤師、地域包括支援センター等と連携し協議を行った。このプロセスでは、過去の看取り事例を共有し、協力医が遠隔死亡診断制度に対して肯定的であることを確認し遠隔死亡診断のリハースルも実施するなど、体制整備がスムーズに進んだ。この取り組みは、GHでの看取りを望む地域住民や関係機関も肯定的に捉えていた。

**4. 看取りと振り返り：**事例の対象は、家族の看取り希望に基づき遠隔死亡診断に関する同意を得た上で、苦痛緩和を中心としたサポート体制が構築された。臨死期はリアルタイムでの情報共有、医師や外来看護師との密な連携が行われ、円滑な看取りが実現した。

**【考察】** 本事例の在宅看取り体制構築に向けた取り組みは、ICTを活用した遠隔死亡診断体制が、GHにおける看取りを望む対象者とその家族、さらには多職種の関係者にとって、精神的な負担を軽減し、質の高い在宅看取りを可能にすることが示唆された。これは医師不足が深刻な地域における看取りの選択肢を広げ、地域医療の質向上に寄与するものと考えられる。GHの遠隔死亡診断実施の体制構築には、長年の入居生活で知り得た利用者・家族の生活史や死に対する価値観、また、その間に形成された介護職員のケアの歴史、利用者・家族と介護職員の間関係、医師の価値観、地域の価値観など多層的な背景を把握し、価値観が一致した上で調整を行う必要がある。

**【結論】** 本事例の在宅看取り体制構築に向けた取り組みは、地域における看取りの選択肢を広げ、質の高い在宅看取りを可能にすることが示唆された。

**【利益相反】** 新潟県立看護大学看護研究交流センター2023年度地域課題研究助成を受けて実施した。報告すべきCOIはない。

新潟県立看護大学看護研究交流センター2024年度地域課題研究 研究助成報告

1. 研究名  
化学療法を受ける肺がん患者の在宅における感染予防行動の実態と行動の動機に関する研究
2. 研究代表者  
佐久間 結衣 日本赤十字社長岡赤十字病院
3. 共同研究者  
佐藤 直人 日本赤十字社長岡赤十字病院
4. 本学共同研究者  
新潟県立看護大学 准教授 榑澤 三奈子
5. 研究助成金執行額（単位：円）

予算額	100,000				
執行額	旅費	報償費	役務費	需用費	合計
	18,824	0	5,230	71,833	95,887

6. 研究成果の公表  
第9回新潟がん看護研究会学術集会

## 化学療法を受ける肺がん患者の 在宅における感染予防行動の実態と行動の動機に関する研究

佐久間結衣<sup>1)</sup>、佐藤直人<sup>1)</sup>、樺澤三奈子<sup>2)</sup>

1) 日本赤十字社長岡赤十字病院 2) 新潟県立看護大学

キーワード：肺がん 化学療法 感染症予防 動機

**【目的】**化学療法に起因する好中球減少は感染症を誘発し生命を脅かす深刻な有害事象である。化学療法を受ける肺がん患者は、好中球減少に加え、高齢であることや進展担癌状態により免疫能低下が懸念され、感染リスクの高い人々である。肺がん化学療法の治療計画では、抗がん薬の投与後、次の投薬までに2～3週間の休薬期間があり、患者は好中球減少が生じやすい休薬期間に自宅で療養するが、外来化学療法を受けるがん患者では入院中の感染予防行動を続ける者の割合が大幅に低下するという指摘がある。患者が自宅で自ら感染予防に取り組むことを支援するには、どのような感染予防行動をとっているのか、またはとっていないのか、その実態と共に行動を導く動機を患者の視座に立ち理解することが大切である。本研究では、化学療法を受ける肺がん患者の在宅における感染予防行動の実態と行動の動機を明らかにすることを目的とした。

**【方法】**研究対象は、地域がん診療連携拠点病院であるA施設で化学療法を2クール以上受けており、研究参加に同意が得られた肺がん患者である。データ収集内容は、自宅での感染予防行動の実態と行動の動機、基礎情報（性別、年代、疾患、治療、家族構成）とした。感染予防行動は、発熱性好中球減少症（FN）診療ガイドラインに基づき、手洗い、入浴かシャワー浴、速乾式アルコール製剤の使用、含嗽、歯磨きを想定した。データ収集方法はインタビューガイドを用いた計1回30分の半構造化面接法と電子カルテでの記録調査とし、得られた録音データを逐後録におこし質的帰納的に分析した。倫理的配慮では、研究の概要、自由意思による研究参加の権利、個人情報管理方法、研究参加による利益と不利益について文書を用いて対象者に口頭で説明し同意を得た。本研究は長岡赤十字病院倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号:240723号）。

**【結果】**研究対象者は男性2名を含む計5名、50歳代と60歳代が各2名、70歳代が1名、全員に同居する家族がいた。疾患では小細胞がんが3名、全員が好中球減少症の発症リスクが中等度から高度の抗がん薬を用いた治療コースを複数回経験していた。対象者が認識していた感染予防行動は、石鹸と流水の手洗い5名、速乾式アルコールによる手指衛生3名、毎日のシャワーか入浴5名、含嗽4名、歯磨き5名であり、その他、マスク着用5名、生ものを控えるなど食事内容の注意4名であった。分析の結果、感染予防行動の動機は、63コードから23サブカテゴリー、9カテゴリーへと集約された。このうち感染予防行動を行うことの動機は、【コロナが流行した今では感染予防が当たり前だから】、【感染予防はもともと続けていた習慣だから】、【抗がん剤治療で免疫力が低下しているから】、【肺がんによる咳きみや痰を減らしたいから】などの6カテゴリーであり、感染予防行動を行わないことの動機は【感染予防をしなくても自分なら大丈夫だから】、【感染予防をすることで肺がんであることや抗がん剤治療のことをいつも気にしてしまうから】の3カテゴリーであった。

**【考察】**結果より、肺がん患者の中には当たり前のこととして感染予防行動を行う人がおり、その行動は生活の中で培われた元々の習慣やコロナの流行により強化されたり新たに習慣化されたりしたものであることが窺われた。また、明らかにされた感染予防行動の動機の半分は、習慣や周りの環境の変化などであり看護師が行動の動機として意図する「好中球減少に起因する免疫能の低下」ではなかった。このことから、患者は生活者の立場で生活の一部として感染予防行動を取り入れており、単に治療のためだけに行っているわけではないことが浮き彫りにされた。したがって、肺がん患者が感染予防行動を行う動機が様々にあることから、取り組んでいる感染予防行動の裏にある動機を尋ねて理解し、治療に関わらない動機も行動の原動力として受け止め、患者の生活に合わせた感染予防行動と一緒に考える必要がある。

**【結論】**本研究により、感染予防行動を行うことの動機は、【コロナが流行した今では感染予防が当たり前だから】、【感染予防はもともと続けていた習慣だから】など6カテゴリーとして、また行わないことの動機は【もともと感染予防の習慣がないから】などの3カテゴリーとして明らかにされた。

**【利益相反】**新潟県立看護大学看護研究交流センター2024年度地域課題研究助成を受けて実施した。

新潟県立看護大学看護研究交流センター2024年度地域課題研究 研究助成報告

1. 研究名

顎矯正術後顎間固定を受けた患者の術前・術後の思いと看護支援の検討

2. 研究代表者

源川 雅斗 日本赤十字社長岡赤十字病院

3. 共同研究者

北見 奈菜子 日本赤十字社長岡赤十字病院

桑原 香菜子 同上

4. 本学共同研究者

新潟県立看護大学 准教授 小林 綾子

5. 研究助成費執行報告（単位：円）

予算額	100,000				
執行額	旅費	報償費	役務費	需用費	合計
	6,802	0	0	38,948	45,750

6. 研究成果の公表

予定なし

## 顎矯正術後顎間固定を受けた患者の術前・術後の思いと看護支援の検討

源川 雅斗<sup>1)</sup>，北見 奈菜子<sup>1)</sup>，桑原 香菜子<sup>1)</sup>，小林 綾子<sup>2)</sup>

1) 日本赤十字社長岡赤十字病院 2) 新潟県立看護大学

キーワード 顎矯正術，顎間固定，術前・術後，思い

**【目的】**本研究の目的は，顎矯正手術後顎間固定を受けた患者が，術前・術後どのような思いを抱えていたかを明らかにすることである。

**【方法】**対象は2024年6月～12月の期間に顎変形症治療目的にA病院に入院し，顎矯正手術を受け術後顎間固定を行った20歳以上の患者で，退院日に研究協力の依頼を行い同意が得られた患者とした。インタビューは，退院後の初回外来診察後にインタビューガイドを用いた半構成的面接法にて行い，質的機能的に分析した。長岡赤十字病院医療倫理委員会の承認（承認番号240618）と同病院研究倫理審査委員会の承認（2024-1-②）を得て実施した。

**【結果】**対象は，同意が得られた手術未経験の20歳代4名であった。顎矯正手術後顎間固定を受けた患者の術前の思いでは，【手術への期待と不安】【術後の苦痛や生活への心配】【経験者からの情報から得られた安心と不安】の3つの思いが明らかとなった。術後の思いでは，【術後の苦痛に対する辛さ】【心の準備により乗り越えた辛さ】【看護師の苦痛への対応に安心】【術前の説明への希望】の4つの思いが明らかとなった。

**【考察】**顎矯正術前，患者は【手術への期待と不安】，【術後の苦痛や生活への心配】をかかえて過ごしており，自身の不安や心配を解消するために経験者から情報を得る行動を起こしていたことが考えられた。対象者が抱える期待と不安が過度にならないよう，正しい情報を提供することが重要である。

術後の思いでは，【術後の苦痛に対する辛さ】として『唾液や痰が溜まって息苦しかった』『話せないことが辛かった』『食べにくいことが辛かった』『吐き気が辛かった』が明らかとなった。看護師は，術前に術後疼痛は我慢する必要はないことを伝え，苦痛や痛みがあるときの対処方法を伝え，会話が難しくなることを踏まえてペインスケールの活用方法について説明し協力を依頼しておくことが大切であると考えた。また，手術当日は，看護師から積極的に疼痛や嘔気，唾液や痰貯留の有無を確認し，鎮痛剤・制吐剤の提案，あるいは吸引の提案をすることも重要であると考えた。【術前の説明への希望】では＜手術の流れが写真で目視して理解できるといいと思った＞というコードが得られていたことから，分かりやすいクリニカルパスの作成を検討していく必要がある。加藤ら（2021）は，体験型オリエンテーションは術後のイメージを深める可能性があることを示している。本結果の＜事前に吸引のオリエンテーションがあると良かった＞というコードから，吸引を体験できるようなオリエンテーションの工夫が考えられた。

**【結論】**術前は，患者が期待と不安が過度にならないよう，正しい情報を提供することが重要であることが示唆された。術後は，顎間固定により口頭で訴えることが困難となるため，会話ができなくても表現できるような質問の工夫や苦痛のアセスメントを行うことが重要であることが示唆された。顎矯正術を受ける患者が，手術の流れや吸引の実際についてイメージ化できるようクリニカルパスを作成することや，術前に吸引の体験をするなど，オリエンテーションの工夫が考えられた。

**【利益相反】**本研究は，新潟県立看護大学看護研究交流センター2024年度地域課題研究助成を受けて実施した。

新潟県立看護大学看護研究交流センター2024年度地域課題研究 研究助成報告

1. 研究名

外来看護業務量データに基づいた外来人員配置の検討

2. 研究代表者

霜田 章子 新潟県厚生連上越総合病院

3. 共同研究者

杉山 江里可 新潟県厚生連上越総合病院

竹内 朝子 同上

村山 典子 同上

山田 望実 同上

4. 本学共同研究者

新潟県立看護大学 講師 船山 健二

同上 准教授 永吉 雅人

5. 研究助成金執行報告 (単位：円)

予算額	100,000				
執行額	旅費	報償費	役務費	需用費	合計
	0	0	0	49,587	49,587

6. 研究成果の公表

なし

## 外来看護業務量データに基づいた外来人員配置の検討

○霜田章子<sup>1)</sup>, 杉山江里可<sup>1)</sup>, 竹内朝子<sup>1)</sup>, 村山典子<sup>1)</sup>, 山田望実<sup>1)</sup>, 船山健二<sup>2)</sup>, 永吉雅人<sup>2)</sup>

1) 新潟県厚生連上越総合病院 2) 新潟県立看護大学

キーワード：外来看護業務量データ 直接看護業務 間接看護業務 外来人員配置

**【目的】** 上越圏域の二次救急および急性期医療を担う総合病院である A 病院外来部門における、曜日・診療科別、診療時間帯ごとの外来看護業務量を定量把握し、直接看護業務と間接看護業務を抽出し分析を行うことで、業務が集中する曜日や時間帯に必要とする看護人員を配置することが可能か検討することを目的とする。

**【方法】** 調査対象は A 病院外来部門に所属する看護師長を除く看護師 39 名。2016 年に杏林大学医学部付属病院の高崎らが作成した調査票を参考に、外来で実施する看護業務を 87 の小項目に分類し、これらを 32 の中項目と 5 つの大項目に整理した独自の調査票を作成した。作成した調査票を用いて研究者ら 6 名でプレテストを行い、看護業務項目等を検討後、調査対象者に 5 日間の業務量調査を実施した。調査票は調査対象者自らが携わった業務と時間を記載してもらい実績記入法を選択。得られたデータから、診療科別に時間帯ごとの業務量を定量把握し、直接看護業務と間接看護業務を抽出。診療科別に曜日・時間帯ごとの業務内容と業務量を可視化し、多面的に外来全体や各診療科の状況を比較・分析した。

**【倫理的配慮】** 本研究は A 病院倫理委員会の承認を得て行った。調査票は、紛失等の事故が生じないように研究者が厳重に管理し、研究終了後は責任をもって情報を破棄する。調査票記入は、病院業務の一環として行い、指定された者が業務として情報収集を行い、業務上得られたデータを A 病院の許可を得て本研究に使用した。

**【結果】** 5 日間の調査期間中における平均勤務者数は 1 日あたり 29.2 名であった。全体の業務量が①中央採血室(1774 分)・②内視鏡検査室(1114 分)・③眼科(1093 分)・④内科(1070 分)の順で業務量が多かった。実質配置人員で補正を行うと①中央採血室・②内視鏡検査室・③内科において業務量が多いことが明らかとなった。①中央採血室・②内視鏡検査室では、直接看護業務が 95%を超えていた。③内科では間接看護業務が 66%を占めていた。

**【考察】** 直接看護業務が 95%を占めていた部署への看護人員配置については、①中央採血室では、採血以外の専門診療科の処置も担っており、②内視鏡室は内視鏡介助等の専門的技術を要するため、経験者でなければ配置困難である。フレキシブルな人員配置を行えるように、専門的技術を習得した看護人材の育成が必要であると考えられた。③内科においては、間接看護業務が 66%を占めており、他部署と比し間接看護業務量が顕著に高いため、他職種へのタスクシフトや AI 活用等を検討していく必要があると考えられた。

**【結論】** A 病院外来部門の曜日・診療科別、診療時間帯ごとの外来看護業務量を定量把握し、直接看護業務と間接看護業務を抽出した。人員配置については、診療科と時間帯の関係について分析を要するため、本研究で得られたデータをもとに、今後さらに分析検討が必要である。

**【利益相反】** 利益相反は生じていない。

**【研究助成】** 本研究は新潟県立看護大学看護研究交流センター 2024 年度地域課題研究助成を受けて実施した。

新潟県立看護大学看護研究交流センター2024年度地域課題研究 研究助成報告

1. 研究名  
NICU 入院児の母親が抱く授乳や搾乳時の不快感の現状と課題

2. 研究代表者  
星野 貴美子 日本赤十字社長岡赤十字病院

3. 共同研究者  
富田 幸 日本赤十字社長岡赤十字病院

4. 本学共同研究者  
新潟県立看護大学 教授 大久保 明子  
同上 助教 小林宏至

5. 研究助成金執行額（単位：円）

予算額	100,000				
執行額	旅費	報償費	役務費	需用費	合計
	42,084	0	33,916	24,000	100,000

6. 研究成果の公表  
第 34 回日本新生児看護学会学術集会

## NICU 入院児の母親が抱く授乳や搾乳時の不快感の現状と課題

星野貴美子<sup>1)</sup>、富田幸<sup>1)</sup>、大久保明子<sup>2)</sup>、小林宏至<sup>2)</sup>

1) 長岡赤十字病院看護部 NICU, 2) 新潟県立看護大学

キーワード：不快性射乳反射 D-MER NICU 母乳育児

【目的】授乳や搾乳時に出現する不快感などの現象は不快性射乳反射（以下 D-MER）と呼ばれ、射乳の直前に起こる数分以上は持続しない突然の感情の落ち込みと定義される。A 病院 NICU に児が入院した母親の中にも D-MER の症状と類似する訴えをする方がいた。しかし D-MER についての看護研究や論文は少なく、NICU 入院児の母親の授乳や搾乳時の不快感の現状や、その母親へのケアは明らかにされていない。そこで A 病院 NICU に児が入院し、授乳や搾乳時に不快感を訴えた母親の症状や思いを明らかにし、看護の在り方を考察することを目的とした。

【方法】1, 研究デザイン：複数事例研究 2, 研究対象者：児が A 病院 NICU に入院し授乳や搾乳時に不快感を訴えた母親のうち、研究の同意を得られた方 3 名 3, 調査期間：2024 年 9 月～12 月 4, 調査手順：A 病院の個室にてインタビューガイドを用いて半構造化面接を行った。5, 調査内容：1) どのような時に不快感を感じたのか 2) 授乳や搾乳のどのタイミングで感じたのか 3) その持続時間・期間 4) 不快感の強弱の有無 5) 不快感の具体的な感情内容 6) その不快感への対処方法 7) 不快感を抱いた時に他者に話したか 8) その時の他者の対応 9) 看護師/助産師の対応で良かったこと嬉しかったこと、逆に不快に感じたこと 10) 医療者や家族等の対応で望むこと 6, データ分析方法：対象者毎に逐語録を作成し、コード化し各項目で整理し、エジンバラ産後鬱質問票(以下 EPDS)の結果、および産後鬱と D-MER の関連性の視点から考察した。

【倫理的配慮】本研究は所属機関の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【結果】NICU 入院児の母親が抱く、授乳や搾乳時の不快感とその対処や思いと EPDS 結果を下表に示す。

研究対象者(面談時期)	A さん(産後 4 カ月)	B さん(産後 1 年半)	C さん(産後 2 年半)
EPDS 結果 (児の入院早期/児の退院前)	17 点/未実施	4 点/3 点	0 点/0 点
初めて感じた時期	産科退院後(自己搾乳開始頃)	妊娠中(乳頭が衣類等で擦れる時)	搾乳中(乳汁の出始め)
不快を感じる時	搾乳中	搾乳中	搾乳、授乳、射乳時
不快感の強弱(一番強く感じる時)	授乳し始め	強弱はない	射乳児
不快感の表現	「悲しくなるような」 「涙出るとか」 「心穏やかじゃなくなる」 「ちょっと不安みたい」	「ゾワゾワする感じ」 「身の置き所がなくなる、イライラする感じ」 「なんかググみみたいな」 「死にたい、みたいな」	「気分がどん底」 「死にたいわけじゃないけど、死にたいって思う」「ちょっと吐き気」
不快症状の対処法	アロマ、動画視聴	音楽を聴く、動画視聴、ハンドクリームを塗る	動画視聴児の様子に集中する
不快を感じなくなった時期	退院後 2～3 カ月して徐々におさまる	直接授乳を開始したころ	断乳後
相談相手	夫、NICU 看護師	夫、助産師の友人	夫、産科看護師
授乳持続期間	産後 4 カ月時点で直接授乳継続中	不明	冷凍母乳の保管がなくなった頃に断乳
看護者への要望	「十分よくしていただいた」	なし	「そうゆう人もいるよってことを言ってもらえたら良かったのかもしれない」
D-MER の可能性	なし	なし	あり

【考察】NICU 入院児の母親は不快症状を持ちながらも、自分なりに対処しながら、懸命に授乳・搾乳を続けていた。また、不快症状と EPDS の結果から、C さんのみが D-MER の可能性があると考えられた。

看護者は D-MER の知識を持つことや D-MER と産後鬱や NICU 入院時の母親の心理的特徴などを見極めながら、母親の訴えを正しくアセスメントすることにより、必要なケアに繋げることが可能になると考える。また、看護者は母親が D-MER による苦痛を体験している可能性を考慮し、NICU 入院児の母乳育児の重要性の説明の際には、授乳や搾乳時の不快感は誰にでも起こり得ることを母親に事前に伝え、母親に共感しながら、母親自身が授乳方針を決定する支援が必要である。

また、3 名全員が母親自身の思いを父親(夫)や看護者に相談しており、看護者は妊娠中から母親との関係を構築し相談しやすい環境を整えておくこととともに、父親にも母乳育児の重要性や D-MER の可能性について説明し、父親と看護者が協働して母親の精神的支援や身体的安静が図れるよう支援する必要がある。

【結論】看護者は D-MER に対する知識を備えること、産後鬱や NICU 入院児の母親の心理的特徴などの視点からアセスメントすることが重要であること、母親が相談しやすい環境を整えること、授乳や搾乳時の不快感により母親失格と自己否定することがないように母親に寄り添うことの重要性が示唆された。

【利益相反】本研究は、新潟県立看護大学看護研究交流センター2024 年度地域課題研究助成を受けて実施した。

新潟県立看護大学看護研究交流センター2024年度地域課題研究 研究助成報告

1. 研究名  
看護提供方式による新人教育への影響

2. 研究代表者  
水澤 真由美 新潟県立中央病院

3. 共同研究者  
城戸 真理子 新潟県立中央病院  
嶋田 早希 同上

4. 本学共同研究者  
新潟県立看護大学 教授 岡村 典子

5. 研究助成金執行額（単位：円）

予算額	100,000				
執行額	旅費	報償費	役務費	需用費	合計
	0	25,200	0	72,138	97,338

6. 研究成果の公表  
学会発表予定

## 看護提供方式による新人教育への影響

水澤真由美<sup>1)</sup>、城戸真理子<sup>2)</sup>、嶋田早希<sup>3)</sup>、岡村典子<sup>4)</sup>

1) 新潟県立中央病院、2) 新潟県立看護大学

キーワード：セル看護提供方式 パートナーシップ・ナーシング・システム 新人教育

**【目的】**A病院B病棟は、2022年3月に看護方式をパートナーシップ・ナーシング・システム（以下、PNS）からセル看護提供方式（以下、セル看護）に変更した。PNSとは、安全で質の高い看護を提供することを目的に看護師同士がペアになり、患者の看護ケアを行う看護提供方式である。また、セル看護とは、患者や看護師にとって利益にならない“ムダ”を省き、ケアの受け手の価値を最大化することを目指した看護提供方式である。そして、各看護師が患者を担当し、その患者の看護ケアを実施するという特徴を持つ。2024年度もB病棟はセル看護を継続しながら、新人看護師や転入者を受け入れている。研究者は、看護提供方式の違いが、新人看護師の自立度、及び成長にどのような影響を及ぼすのかを明らかに出来れば、今後の新人教育への効果や課題が明確になると考えた。しかし、セル看護による教育の効果・影響等に関する先行研究は見当たらなかった。そこで、セル看護とPNS、それぞれの看護提供方式における新人看護師と卒後2年目看護師を対象に調査することにより、新人教育への効果を明らかにすることができるとともに、今後の課題を検討することができると考え、研究に取り組むこととした。

**【方法】**対象はセル看護を採用するB病棟とC病棟の新人看護師および卒後2年目看護師4名と、PNSを採用するD病棟とE病棟の新人看護師および卒後2年目看護師4名、計8名である。研究デザインは、質的記述的方法、調査は半構成的インタビューにより行った。調査内容は、先行研究等を参考に、「受け持ち患者数と看護展開」、「動線・先輩の距離とフォロー体制」、「主体性・自発性、看護技術習得の機会」、「新人の抱えるストレス」の5項目とし、インタビューガイドに沿って聴取した。得られたデータは、質的帰納的に分析し、セル看護、及びPNSにおける新人看護師の自立度や成長を比較し、考察した。

なお、本研究は研究者の所属する機関にて倫理審査を受けたのちに、実施した（看第202404号）。

**【結果】**対象者は、セル看護、及びPNSともに、新人看護師2名と卒後2年目看護師2名の4名ずつ、計8名であった。セル看護では、5カテゴリが抽出された。カテゴリは、【発信力が自分の成長に影響】、【支援体制と相談環境の充実】、【業務遂行と職場環境に対する不安・ストレス】等であった。PNSでは、7カテゴリが抽出された。カテゴリは、【タイムリーに相談できる支援体制】、【報告・相談・振り返りはタイムリーに実施】、【業務や先輩看護師への対応負担】、【タイムマネジメントを意識した行動】等であった。

**【考察】**セル看護、及びPNSにおける新人看護師の自立度や成長について考察する。セル看護における【発信力が自分の成長に影響】のカテゴリは、PNSが先輩看護師と常時ペアになり行動することに対し、セル看護は新人看護師であっても単独で行動しなければならないという特徴に関連する。新人看護師は、自分が主体的に行動しなければならないことを認識し、それが成長につながっていることを実感していたと考えられる。PNSでは、【報告・相談・振り返りはタイムリーに実施】というカテゴリから、ペアの看護師と行動を共にすることで、報告・相談等は適宜実施していたことが伺える。こうした看護提供方式が新人看護師の報告・連絡・相談の力の習得を促進させたと推察される。ストレスについては、セル看護の【業務遂行と職場環境に対する不安・ストレス】、PNSの【業務や先輩看護師への対応負担】というカテゴリから、業務量や知識不足への不安に加え、一貫性のない指導内容、先輩看護師への遠慮があったと推測できる。どちらの看護体制であっても、教育支援体制の整備が重要となることが明確となった。

### 【結論】

看護提供方式による新人教育への効果や影響を明らかにすることを目的とし、調査を行った。その結果、セル看護は自立の促進と自信につながっていることが分かった。また、PNSは適切なタイミングで情報共有する力を養うことで成長していることが推察された。今後の課題として、いずれの方式においても新人看護師の成長を支えるため、一貫性のある継続的な教育支援体制の整備が重要であることが示唆された。最後に、本研究を実施するにあたり、後押ししてくださった相馬友紀 前看護師長に感謝申し上げます。

**【利益相反】**本研究は、新潟県立看護大学看護研究交流センター2024年度地域課題研究助成を受けて実施した。

令和 7 年度  
公立大学法人新潟県立看護大学  
看護研究交流センター 活動報告書

令和 8 年 5 月 発刊

発行 公立大学法人新潟県立看護大学看護研究交流センター  
〒943-0147 新潟県上越市新南町 240 番地  
TEL・FAX 025-526-2822